

続・発音記号再考

橋本 雅文

1. はじめに

昨年(2009年)11月、本誌で拙稿「発音記号再考」を発表する機会を得た。幸いにも、掲載直後から同僚をはじめ、他校の先生方からも「読んだ」の声を、中には「面白かった」の評まで頂戴し、日頃何気なく考えていることを文字にすることと、それを発表することの意義を再確認した次第である。

前稿では、現行の発音記号の [a] と [ɑ], [o] と [ɔ], [ʌ] と [ə], そして [ŋ] と [n] において、それぞれの区別が不要であることを例証しながら、(1)に示すような発音記号の整理・統合を提案するとともに、なぜそうするのかを論じた。

- (1) a. [ai], [au] ⇒ [aɪ], [aʊ]
 b. [ou] ⇒ [ɔʊ]
 c. [á] ⇒ [ǎ]
 d. [ŋ] ⇒ [n] (ただし、語尾の [ŋ] ⇒ [ŋg])

さて、本稿では、前稿を踏まえて、そもそもなぜ発音記号(ならびにその指導)が必要なのかを中心に論じることにする。

2. コミュニケーション能力の育成

現行の「高等学校学習指導要領」を見ると「英語科の目標」として次のように書かれている。

- (2) 英語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、①積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする②実践的コミュニケーション能力を養う。

[下線とそれに付した数字は筆者による]

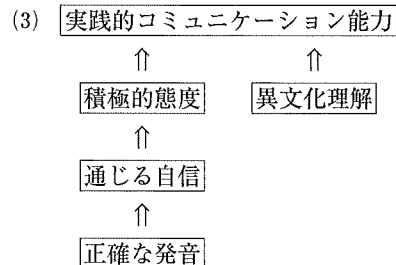
まず、下線部①の「積極的な態度」は必ずしもオーラルのコミュニケーションに限ったものではないだろうが、英語を聞き、話す面での積極性を、とりわけ話す際の積極的な姿勢を主眼に置いていること

は否めない。

さて、会話における積極性という話になると、「英語は度胸だ」とか「ブロークな英語でもよいから、とにかく自信をもってしゃべればよい」などという乱暴な議論になりかねないが、この類の発言は不合理であり、説得力を欠いている。それは「それで通じるのかどうかわからないものに自信などもてない」というのが率直な実感だからである。「自信をもつにはそれなりの根拠が要る」というのは英語学習の領域を越えた一般の真理である。

コミュニケーションにおける積極的な態度の根拠になるのは、自分の発話が相手に通じるという自信であり、その自信は(少なくとも自信の一部は)正確な発音から生まれる。

そして、この積極的な態度が(2)の冒頭部分にある「異文化理解」と相まって、下線部②の「実践的コミュニケーション能力の養成」を支えることになる。以上の構図をまとめると(3)のようになる。



つまり、実践的コミュニケーションの基盤を成すのは「正確な発音」である。ただ、この点については、何を「正確」とするのかを明確にしておく必要があるだろう。英語を母語とする人々においてさえ、さまざまな英語があり、それに英語を第二言語として、あるいは外国語として使用する人々を加えると、その Englishes は実に多様なものになるからである。

本稿で言う「正確な発音」とは、端的に言うと、教科書や英和辞典に記されている国際音声記号(IPA)の表記(あるいは、それに準じた発音記号)で示された、特定の地域に限定されることのない標準的な発音を意味する。

このことは、日本語が外国語として学習される場合を考えると理解が容易になる。日本語にも地域によってさまざまな発音のしかた、すなわち訛りが存在するが、外国語としての日本語学習者は、やはり日本中あまねく通用する標準的な発音を目指すのが妥当かつ自然なことであろう。

3. カナ表記をめぐる

3.1. カナ表記の精度

日本語を母語とする学習者にわかりやすいようにという配慮から、特に初心者用英和辞典などでは、英語の音を表すのに「カナ表記」を採用している場合が多い。もしカナによる表記が発音のしかたを示す役割を十分に果たすのであれば、[ə]や[θ],[ʒ]などの見慣れない記号を用いた発音記号に固執する必要はなくなる。

このカナ表記に関して有本(2009)は、たとえば milk を「ミルク」と表記する従来型の表記と、「メウク」というような工夫を凝らした表記の2種類について、ゼミ学生による次のような実験結果を紹介している。

- (4) 日本人で英語を学習したことがない高齢者にこのカタカナ語を読ませ、その録音を英語のネイティブスピーカーに聞かせ、「この日本人は英語を話そうとしています。なんと言っているか、わかる範囲で書き取ってください」というアンケート調査をした。結果として、ほとんどの回答者は、英語として無意味なことを話しており、理解できないというものであった。

そして、こう結論づけている。

- (5) カタカナ表記で読むと、それは結局、日本語でしかなく、英語の代用にはなり得ないということである。

3.2. カナ表記を用いる理由

次に、ある英和辞典のカナ表記を、現行の発音記号と比較しながら、カナ表記を用いる理由を探って

みたい。

まずは、先ほどの milk から見てみる。この辞典では、有本の言う従来型に近い表記が用いられている。

- (6) milk [mílk ミルク]

ただし、ゴシック体で示している[ミ]は実際には赤字で表記されていて、それはそこに強勢が置かれることを表している。また、[る]がひらがなで表記されているが、同辞典ではひらがなは要注意の音を意味し、[る]の場合は、それが[r]ではなくて[l]の音を表している。したがって、たとえば

- (7) a. right [ráit ライト]
b. light [láit ライト]

という具合になる。

もう少し他の語を拾ってみると、

- (8) a. apple [épl あぷる]
b. about [əbáut アバウト]
c. life [láif ライフ]
d. live [líf リヴ]
e. both [bóuθ ボウズ]
f. with [wíð ウィズ]

に見られるように、[æ]と[a]の音の違いや、[f],[v]の唇歯音、それに[θ],[ð]の歯音なども、カタカナとひらがなを使い分けながら巧みに表記している。

さて、なぜこれほどまでにカナ表記にこだわるのかと言えば、その理由は明白で、IPAの発音記号は特に初心者には難しすぎると、少なくともカナ表記の支持者は考えているからにほかならない。

3.3. カナ表記の問題点

しかし、上記のような工夫を凝らした発音のカナ表記にもいくつかの問題点が存在する。ここでは上記の(7)と(8)にあげた語を例に検証する。

まず、(8a)と(8b)の[あ]と[ア]には、どうしても[a]の音——より厳密に言うところ、たとえば雨(あめ)の「あ」のように、日本語の「あ」で表される音——のイメージがつかまとうという短所がある。ところが[æ]や[a]を用いると、これらは[a]とは異なる音であることを明示することが可能になる。同様に(8c),(8e),(8f)の[ふ],[す],[ず]からも、やはりそれぞれの文字がもつ日本語発音を拭い去るのが難しい。その日本語の音声の連想を免れるのは(8)の6語の中では(d)の[ヴ]だけである。

次に(7)の2語における[ラ]は綴り字のrに、一方[ら]はlに対応するという説明は、[ラ]とr,[ら]とlにはそれぞれ必然的な結びつきがないので非常にわかりづらい。その必然性のなさば、[ラ]と[ら]の表記を入れ替えても一向に差し支えないということによって証明される。

さらに見逃すことのできないもうひとつの問題は、(8a)のap-ple と(8b)のa-bout はともに2音節の単語だという点にある。ところが、[あづる],[アバウト]と表記すれば、それぞれ3音節と4音節の語として読まれる危険性が生じてくる。さらに、(7)と(8)であげた残りの6つの語はすべて1音節の語であるが、カナ表記を用いると、それぞれが正しく1音節で発音されるとは考えにくい。

英語の発音のしかたを指導する際に、英語の教員はいわゆる「カタカナ発音」からの脱却に腐心している。right は*[ráito]にならないように、life は*[láifu]にならないようにと何度も繰り返して指導している。カナ表記には、そういう日本式発音からの脱皮を阻害する怖れがある。

4. 電子辞書の読み上げ機能

4.1. 進化した電子辞書

最近の電子辞書の進歩には目を見張るものがある。手元にある電子辞書(CASIO EX-word XD-GF9800)にも、研究・学習のためのさまざまな種類の辞書に加えて、百科事典や医学事典、冠婚葬祭マナー事典や手紙の用例辞典、さらには11か国語での海外旅行の際等に役立つ会話集や脳を鍛えるパズルに至るまで、計89もの数の辞典等が搭載されている。

それに加えて、この辞書にはネイティブの発音が約10万語収録されていて、それ以外の語についても、合成音声による発音が備わっている。

ところで、電子辞書がもつこの「読み上げ機能」のために、「辞書が発音してくれるので発音記号など要らない」という考えをもつ人すら現れる始末である。ここでは、この読み上げ機能について考える。

4.2. 読み上げ機能の限界

まず、上記の電子辞書を使用して、(7)や(8)にあげたような既知の単語を選んでその発音を聞いてみたところ、その語の発音をほぼ問題なく聞き取ることができた。

次に、ある(紙の)英和辞典を無作為に開いて、そのページにある語の中から、筆者にとっては未知の単語で、かつその綴りを見てもその語の発音が明確でない語を選んで、その音声を電子辞書で聞いてみることにした。

この手順で fluoresce という語を選んだ。そして早速、同語の音声を電子辞書で聞いてみたが、筆者には明確に聞き取ったという確信はもてなかった。ちなみに発音は[fluarés]で、意味は「蛍光を発する」である。発音記号で確認してからもう一度聞き直すと、「そのように発音しているかなあ」というところが正直な感想であった。

以上は、筆者の個人的な感想にしか過ぎず、調査や実験と呼べるものからは程遠いものではあるが、読者諸氏にも同感していただけるのではないだろうか。

電子辞書のもつ読み上げ機能は、紙の辞書には到底手出しのできないものであり、また上記の電子辞書は、音量や音声速度までもが調節できるという非常に多機能かつ高機能な「すぐれもの」である。

しかし、上記の fluoresce が示すように、学習者がもし発音記号を読むことができなければ、たとえ辞書の発する未知語の音声を聞いても、それを正確に認識して、それに倣って正しく発音することはまず不可能である。言い換えると、電子辞書による読み上げは、まずは発音記号のリテラシーを前提として、それを補うものにしか過ぎないと言えるだろう。発音記号と辞書の音声との関係は、音楽の楽譜とその演奏録音の関係にたとえることができるだろう。楽譜が正しく読めれば楽器の演奏は可能になるが、録音だけを頼りにして、それに倣って楽器を演奏することは、はるかに大きな困難を伴う活動になる。

5. 発音記号の指導

5.1. 発音記号の必要性

3.と4.では、発音のカナ表記や電子辞書による読み上げ機能は、いかに優れたものであっても発音記号に匹敵するものではないことを検証してきた。やはり、発音記号の学習は欠くことができないようだ。次に、発音の指導法について発音記号の導入方法を中心に考察する。

手始めに、[f]と[v]について考えてみる。IPAの発音記号では、特に初心者には難しいだろうと考えて、両者の発音をカナで表したところで、それで

学習者の負担が減ることにはならない。それは、カナ表記でなら発音のしかたがわかるということにはならないからである。たとえば life [らいふ]の[ふ]において、「ふ」というひらがなが普通に表す音に引きずられて[hʌ]という音を出すと、それは英語の正しい音にはならない。

そこで、発音記号のより効果的な導入の方法として、まずはアルファベットの26文字がしっかり読めるというところから始めてはどうだろうか。英語の授業の始まりに「A,B,C,D,E,F,G... X,Y,Z」と26文字の読み方を、たとえばF[ɛf]とV[vɪ:]について「下唇を上の前歯に当てて」という正しい発音のしかたを示しながら、1字ずつ繰り返して練習させる。そして、文字のFとVの発音記号には、それぞれ[f]と[v]が登場することに気づかせる。こういった手順で、文字のFと[f]という音には、同様に文字Vと[v]には有機的なつながりがあることを理解させる。

[l]と[r]についても、3.でも論じたように、[ら]や[ラ]を見ただけでは、発音のしかたはわからない。そこでこの「A,B,C...」の方式で、まずは文字のLとRの発音を身につける。そうすれば、発音記号の[l]と[r]がそれぞれどういう音を表すかは難なく理解できるようになる。

5.2. アルファベットの利用

ところで、アルファベットのA~Zのそれぞれの文字の読み方を繰り返して練習することには、上で見た[f],[v]や[l],[r]のほかに、(9)にあげる発音の指導においても効用がある。

(9) [ei],[s]・[ʃ],[ou],[j],[tʃ],[w]

[ei]の発音はA,H,J,Kで練習できる。つまり、Aの読み方は[é:]ではなくて[éi]であることを徹底的に練習する。すると、日本語話者は、たとえば「映画(えいが)」を[eigə]ではなく[e:ɡə]と発音するので、greatなども*[gré:t]となりがちだが、これを正しく[gréit]と発音できるようになる。[e:]が[ei]に修正されるだけでも、日本人の話す英語は格段に英語らしくなる。

[s]と[ʃ]はアルファベットのCで練習する。Cはseeやseaと同じ[sí:]であって[ʃí:]でない。初歩的なことのようにだが、[s]と[ʃ]との混同は初心者に限った現象ではない。

[ou]はアルファベットのOを使って練習する。O

の正しい発音を習得すると、たとえばopen[ɔpn]が*[5:pn]とならずに英語らしく発音できるようになる。(なお、[ou]ではなくて[ɔu]と表記することについては、前稿「発音記号再考」を参照いただきたい。)

[j]の発音はアルファベットのUで行う。Uの発音は[ú:]ではなくて[jú:]と表記されることや、[j]という発音記号に影響されて[dʒú:]と読んではいけないことを実際に発音させながら説明する。

このほかにも、Hで[tʃ], Yでは[w]の発音記号が導入できる。

「A,B,C...」の発音練習を毎時間のウォーミングアップとして利用すれば、その効果は「教室が活気づく」という域にとどまるものではない。

6. おわりに

英語でのコミュニケーション能力は正確な発音がその下支えとなり、正確な発音には発音記号の学習が不可欠である。これが本稿の論旨であり、このことを多くの具体例を交えながら論じてきた。

最後に、発音記号は次の2つの大切な役割を担っていることを述べて本稿を閉じることにする。

(10) a. 自学自習を支援する

b. 異文化理解を促進する

(10a)は、教科書に登場する新出語などは、授業中にその発音を教わることができるが、発音のしかたについての教室外での学習を保証するのは、辞書にある発音表記にほかならないからである。

また(10b)は、「日本語のカナ表記では表すことができない音声を用いて暮らす人々がいる」という実感こそが異文化への関心とその理解の第一歩になるからである。したがって、(3)の図には「**正確な発音**」から「**異文化理解**」に向かって、矢印がもう1本書き足されることになる。

参考文献

- 有本純. 2009. 「英語の発音指導と教師の資質」『STEP 英語情報』2009 7・8月号, 12-15. 日本英語検定協会
- 橋本雅文. 2009. 「発音記号再考」『CHART NETWORK』No.60, 7-10. 数研出版
- 文部省. 1999. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編』

(京都教育大学附属高等学校教諭)